童

2016年３月２０日.

　クロッカスや水仙の芽が、スーッとどんどん地面から日毎に伸び始めている姿は、まるで夏休み後に年長児の手足や背丈が伸びるそれと全く似ているような感動を持つ季節となりました。
　今年は、待ちに待った春の訪れと言うよりも、あっけなく春が来てしまったという感じですが、皆さんにとっての春の訪れはいかがでしょうか。その中でも、年長児関係者は、この時期は格別な思いかもしれませんね。
　大地では、ほとんどこの時期になっても、卒園卒業小学校というキーワードや言葉はほとんど意識的には使いませんし、意識もあまりさせていません。唯一、卒業証書作りだけかもしれませんが、それすら温泉に入って盛り上がった方が勝っていたかもしれません。それは、最後まで大地時代を楽しんでほしい、完全燃焼してほしいと言う願いと共に、やりきった後の切り替えというか更なる希望、高みを求めて進んで欲しい、更なるエネルギーを持って好奇心を持って新しい世界に飛躍してほしいという願いがあるからです。

　そんなはなむけとして、戸隠の鏡池クロカンツアーは、最高でしたね。お天気やその美しさはもちろん奇跡的で格別最高でしたが、何よりも、子ども以上に大人たち保護者の皆様たちが、エネルギッシュにそして愉快に子ども心を持って楽しんで満喫している姿が素晴らしいの一言でした。その愉快で楽しいというエネルギー溢れる流れが、まさに大地ならではの春の訪れにつながっている実感があります。
　その流れの源は、昨年４月の森の親睦会での家族一芸を口火に、ののはな文庫祭り、海水浴夕涼み会、登山、運動会、子ども祭り、そしてクリスマスマーケット等　皆で顔を突き合わせ悩み企画計画実践してきた賜だと確信しています。まさに「人は仲がいいから一緒に食事をするのではなく、一緒に食事をするから仲良くなる」　一緒に行動するから絆が深まる　という事でしょうか。
　１０年後　２０年後も、こんな仲間と暮らしが継続していたら幸せです。きっと大地ＯＢＯＧたちはそうでしょう。

【うさぎ】

　うさぎ、青山家の末っ子が長年可愛がってきているうさぎとも、この春東京へ旅立つのでお別れを迎える。青山家は、末っ子に代わり、うさぎの面倒を見なければなりません。寂しくなるので、うさぎを末っ子だと思い世話をしていくことでしょう。

　そんな中で、我が家にこの１月ごろから、新たなうさぎが訪れて住み始めました。それは、長男が連れてきたうさぎです。もうご存知のように、小沢健二の「うさぎ」です。このお陰で、長男の暮らしは一段と加速度を増したように見受けられます。このうさぎは、地球的な規模で人類の暮らしに警鐘を鳴らしているものなのですが、更に、その**「うさぎ」**の後に、親子、家族、子どもとの暮らしの**「牧子」**（個人的にはこのコーナーが一番好き」が続き、その後に日本の政治政界を斬る**「俊夫」**が続くうさぎ劇場！！

　何の意味やらわからなくなってきましたが、**「子どもと昔話」**というお話や昔話を学ぶ人たちが読むマニアックな薄い季刊誌です。この本を知っている人は、相当な通でしょう。この季刊誌の中身が、実はすごいのです。自分たちの暮らしは、実はどんなふうに操られ、乗せられ、視点を背けられ、巻き込まれているか。冷静に考えれば、あたり前じゃない、からくりに気が付くよね　と言う感じで読み続け、そして、子育てもそうじゃない、政治もそうじゃないという感じで、一つ一つ納得満足していくという内容なのです。

　お話や絵本の本の中に、そんな内容が！！で開けてびっくり玉手箱、そしてあの渋谷系で一世を風靡したあの小沢健二が！！　妻が昔話大学で教えてもらった小沢俊夫さんが！！　青ちゃんが１０年前にファンになった著書「子どもの場所からの」小沢牧子さんが！！　全く接点のないあの偉大な演奏家小沢征爾のお兄さんや甥っこ達が！！
　こんな本の中でこんな世界を発信していたの！！　この本は、１９９９年発行され、うさぎは　２００５年秋から連載され始めたらしいです。我が家には、２００３年位まで購入していましたが、途中で途絶えていました。

　そして、どんな因果かうろ覚えですが、長男がうさぎうさぎと騒がしくなり、「子どもと昔話」の本はないかと探し始め、結局バックナンバーを全部揃えてしまったというのが現状。今連載は４０号まで続き。一話完結シリーズなので、どの本をとっても読めるのですが、「ウサギ」「牧子」「俊夫」を一気に読むには、ものすごい覚悟とエネルギーが要ります。そして、毎回頭を殴られますというより目覚めさせられます。決して、厚いページ数の多いものではなく（本自体は、福音館母の友と同じ）その内容が、深すぎるのです。おとぎ話　物語のように「昔　昔　あるところに・・・」で始まり読みやすいのですが、いつの間にか頭をフル回転しなければならない状況に追い込まれ、読み続けなければならない、途中でやめることができない呪いに包まれる感じなのです。そして、結局読まされてしまい、そして、今の暮らしは違う、自分で変えなくちゃ！！と奮い立ってしまうのです。

　電気消さなくちゃ　流行に流されないぞ、コマーシャルに乗せられなぞ、新聞記事信じない　あれは買わない
　あのメーカーは信じない　銀行変えなきゃ　車よりも自転車　楽合理的はやっぱりだめかな　経済消費社会の歯車を見直すにはどうしたらいいか　やはりオーガニックな暮らし　子育ては・・・・・・・・・・・・・・・書ききれないほどのぞっとする気付きがあるのです。

　先月行われた雄飛主催のうさぎカフェもすごかったです。この消費成長経済社会の中で、極貧　戦後　高度成長期そして　現在を生き続けてきた母親（８３歳）の感想も重かったです。極貧からの解放された現代の暮らしの中で、その時代と比べたらもちろん苦労ない快適な暮らしをしているのですが、その母親から見れば、雄飛の現在の暮らしは、自分が極貧の時代に暮らしたようなことをしている。それを楽しくやっている孫たち。**「長い時代を生きさせてもらって幸せだ。若い人たちから、こんな生き方を見せてもらえて」**決して評論家のように、貧しくても幸せだったとか現代の物の豊かさとは違う豊かさが昔にはあった　などという言葉ではありませんが、時代の流れをその時代に生きた人にしか表現できない言葉と受け止めました。そして、同時に、これからは、若い人たちが考えていくんだよ　というメッセージを受けとりました。

　「豊かさをいかに維持するかではなく　豊かさとは一体何なのか・・・現在は　自分の手で何も作らず単に財布の開け閉めしていても一日が暮らせる。地面を意識して生きるのではなく、空中に漂って生かされているという言葉がふさわしいほど、人は落ちぶれておる・・。自然と付き合い自然を生かし、自然の一部である私たちの身体を使って暮らしを作り、人を消費に駆り立てるこの社会に今度こそ歯止めをかけたい。豊かさとは何かを問い、暮らしを少しずつでも変えていくことは、この原発惨禍が私達大人に課した大きな宿題の一つだと思う」（子どもと昔話４９号牧子より）
　大地　大地の子ども達そして集う人たち、せめて自分の暮らしはできる所から下請に出さずに　不器用でも　見てくれが悪くても　自分の手で　家族での手で　どんどん手を出して楽しむ暮らしをしていこうではありませんか。